

---

# あれから僕たちは・・・

tsubochika

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あれから僕たちは・・・

### 【Nコード】

N4292D

### 【作者名】

tsubochika

### 【あらすじ】

高校生になった野球好きの龍一が、大親友の慎と繰り広げていく物語。あることをきっかけに次第にすれ違っていく彼らの行く末とは？また、彼らの周りの仲間たちの関係にも注目！！

## 第1話 Memory

長かった試験勉強も終わって、念願の高校生活が始まった。新しい生活のスタートに心浮かれていた。あっそうそう、自己紹介するの忘れてた。俺の名前は龍一。カッコイイでしょ？友達には言わなけれど結構気に入ってた。そして野球が好き。中学でもピッチャーだったんだ。野球といえば俺とバッテリーを組んでた慎は俺と大の親友。いつも冷静で時々頭に来るけどいいやつ。同じ高校入ったから、またバッテリー組めるといいけど……。おっと、噂をしてると何とやらかな。慎が掃除を終えたようだ。

高校に入ってから、いつもこうやって一緒に帰るようになった。話題といえばいつも野球だったけどね。でもある日、奇妙なことを言った。

「今の生活、楽しい？」

「いや、楽しいけど。」

「……………あ、ごめん、こんなこと聞いちゃって。」

「へ、いや何のこと？」

俺は慎を察して深くは突っ込まなかったが、後々もつと聞いておけば良かったと思った。2人は何かを察し合い、お互い無言だった。

「そういえばお前、野球部入るんだよな。明日見学行ってみようぜ。」

「ああ、わかった。」

少し心配だった。「わかったと言ってくれるか。その理由は約半年前に遡る。

中学三年の夏。野球の県大会決勝戦。多くの応援の中、あと一歩で全国大会というこの試合、負けられなかった。試合は九回表を迎え二対二だった。マウンドを降りた俺に慎はこうつぶやいた。

「後は俺に任せろ。」

その言葉は今でも忘れられない。ツーアウトランナー無し。延長戦か、サヨナラ負けか。そういうムードの中、中学でも指折りのスラッガーであった慎は甘く入ったカーブを捕らえ場外ホームランを決めた。そこまでは良かったのだが・・・。

マウンドに向かうのが怖かった。差は一点。俺は先頭打者をストリークのフォアボールで出してしまう。後でナインが声をかけてくれていたのを知ったが、この時は緊張で全く聞こえなかった。でもその後、よくは覚えていないがツーアウトにこぎつけた。しかしバッターは四番、慎と並び称される屈指のバッターだ。打率は六割二分三厘。ホームランはないがミート力はずば抜けている。慎は、

「ホームランさえ打たれなきゃ大丈夫。」

そう言っただけで内角のカーブを要求してきた。俺の得意球でもあったが、奴の得意球でもあった。裏を掻こうというのだ。緊張の中、投げたボールは際どく入った。しかし奴はフォームを崩されながらもスタ

ンドに一直線で運んだ。後で聞いたが、カーブは予想もしていなかったし、ただボールにあわせただけだったと本人が言っていたが、投手にとってこれほど悔しい言葉はなかった。

チームはサヨナラ負けをした。だれも俺たちを攻めるやつはいなかったが、後々慎のリードが悪かったと周りで言うやつもいて、責任の強い慎は少し野球に嫌気をさしていた。

他人からして見ればそうたいしたことではなかった。俺も思うのだが、あれから俺たちは何かが変わった……気がする。

そしてまた桜の木の下でいつものように別れた。今日の強風のせいか、だいぶ桜が散っていた。その桜をボーッと見つめていると後ろから誰かにド突かれた。こうされれば大体誰かわかる。中学時代強健のセンターとして活躍……したかは定かではないが、こいつのバックホームに何度も助けられた。おかげで借りを返せと借金取りのように毎日やってくる。困ったもんだ。って誰か言っ  
てなかったわ。こいつは明だ。

「何、桜なんか眺めてるの？あ、わかった。恋してるんでしょ？」

ほんとにこいつはうるさい。こんなこと言わなきゃほんとにいいやつなんだが。

「お前はほんとに能天気だなあ。」

「お前に言われたくないよ。」

「何を根拠に？」

「お前はただの野球馬鹿で、俺は天才。」

おいおい、嘘は言つなよ。

「あーあー野球馬鹿で悪かったよ。中学の時結局一度も俺の球打てなかったくせに。」

「テストの点数はいつも俺が上だろ？」

「おいおい、それとこれとは話は別だろ。」

「そういえば、慎は？」

「もう帰ったけど。」

「あいつ野球部入んの？あいつ相当悩んでたじゃん。」

「やっぱそうなの！？」

「いつしよにいるくせに気づかなかったの！？まあ、あいつのこ  
とだから気づかれたくなかったんだろ。ほら、捕手は投手に苦労さ  
せないんだよ。」

「へえ〜。」

何で俺にそういうこと話してくれないんだろうか。そう思いつつ今  
度はプロ野球の話で盛り上がった。

明と別れてすぐ家に着いた。帰ると親は勉強しなさいとうるさい。高校は中堅の学校で進学校でもなくせに大学進学率を上げようと必死だ。大学で野球をしたかったから、意地でぎりぎりの学校に入ったが、明日から講習続きらしい。まだ予習もしていない。あゝ、もう嫌だ。そういえば明日は体育だったけ。野球部にいくのも楽しみなな。おっ、明からメール？

- 日本ハムが逆転したぞ！！

だから俺はソフトバンクのファンだったの。明の馬鹿さ加減に呆れて俺は勉強することにした。

## 第1話 Memory（後書き）

読んでくださってありがとうございます。いかがだったでしょうか？この次がどれだけ先になるかわかりませんが、続きも読んでくださるとありがたいです。



## 第2話 違和感

次の日

ついに長い授業が終わり、放課後になった。待ちに待った部活見学。早速慎と野球部に行くことにした。芝のあるグラウンド。田舎ならではの広さだ。

マウンドで投げさせてもらえるとということだったので、俺は一球投げさせてもらった。投げた瞬間、自分でも感覚が違ったのがわかったが、何よりも3年生の正捕手が球を後逸してしまった。

「おいおい、なんてゆう球投げるんだよ。140kmは出てるぞ。」

「はあ。」

俺にもよくわからなかった。監督の目に止まった様で、

「どうだ、入部するんだろ？」

「まあはい。」

「球種全部投げてみる。」

俺は今まで超遅球投手だったので、変化球は4つ持っていた。もしかしたら受験勉強しながらランニングと筋トレを欠かさなかったのが効いたのかもしれない。

「まずはカーブ！」

久しぶりの慎のミット。しかし慎は首をかしげた。

「次はスライダー。」

まだ納得しなかった。この後も、フォーク、チェンジアップと投げたが慎はなんとも言わず、監督がストレートを要求したのでまた投げた。

とにかく球速だけは早くなったのは確かだったが、俺にもしつくりこなかった。監督は俺たちに明日から練習に参加するように命じて俺たちを帰らせた。

何なんだ・・・・・・・・。そうすると慎はこう言った。

「回転が足りないんだよ。球威はないし、コントロールがめちゃくちゃだ。」

何だよ、いきなり・・・・・・・・。慎はすべてを見透かしていた・・・・・・・・。

「ランニングをもっと増やして、シャドウピッチングをすることじゃあな。」

そう言う慎は一人で帰っていった。なんかやな感じだな。

「お前、すげえな！あんな球投げてたっけ？」

「なんだ、明か。お前こそ素振りしてないと、センターなんか夢のまた夢だぞあ。」

「なんか今日いつも以上に冷たいね。」

「別に。」

俺は野球を楽しめればいいと思ってきた。が、この時初めて、甲子園で勝つてやる……そんな気持ちが心の中に芽生えた。

## 第2話 違和感（後書き）

第2話も引き続き読んでいただいております。是非続きを読んでいただければ幸いです。

いよいよ野球部に入部し、すれ違っていく二人が共に甲子園を目指していきます。この先は大きく展開が変わっていきますのでお楽しみください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4292d/>

---

あれから僕たちは・・・

2010年12月18日02時35分発行